慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	金子喜一論
Sub Title	Life and works of Kiichi Kaneko
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	1967
year	
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and
	sociology). Vol.40, No.10 (1967. 10) ,p.74- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19671015-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

澬 料

金 喜 論

中 村 勝 節

うのは、 カの社会主義の影響は大きかつた。(1) た日本人社会主義者・無政府主義者の研究はかなりすすめられてお でも明治末期にサンフランシスコを中心とする太平洋沿岸に在住し なるものであるが、まだそれの綜合的な研究は現われていない。それ 通してわが国の運動に多大な影響をあたえた者もまた少くない。ア 住したまま社会主義者として活躍し、日本の社会主義者との連絡を となつて帰国した者も多いということである。またはアメリカに在 けたのはヨーロッパの社会主義の影響もあるが、それ以上にアメリ 日本人社会主義者とわが国社会主義との関係は重要な研究テーマに メリカの社会主義と明治期のわが国の社会主義との関係、また在米 響を受けたものもあれば、アメリカへ渡つたり留学して社会主義者 明治三十年代におけるわが国の社会主義の勃興に外から拍車をか 、これとわが国社会主義運動との関係は次第に解明されつつある。 アメリカで発行された社会主義書籍が輸入されてそれの影 この場合、アメリカの影響とい

本稿でとりあげる金子喜一は、 明治三十年代のはじめから同四十 ば幸である。 う点からも

不明な点が多いが、 今日自由に見ることができるが、 1 昭和四十一年九月)

明治四十二年に彼が帰国した時に一回行われただけである。こうい 稿した在米日本人で金子以上に寄稿した者はいないが、 日本当局によつてかなりくわしく調査されており、 ある。太平洋沿岸の在米日本人無政府主義者・社会主義者の行動は 絶えず連絡をとり、わが国の新聞、 二年までワシントン、 伝につとめた者である。金子喜一の本格的研究は全く未開の分野で 義の思想啓蒙運動をした人物であり、 = = 1 3 本稿が金子喜一研究の踏台ともなれ わが国の社会主義新聞・雑誌に寄 7. 雑誌上に寄稿して彼の思想の宣 その間わが国の社会主義者と シカゴといつた土地で社会主 その調査資料は 彼の調査は

- 義にあたえた影響について簡単にふれておいた。 中村菊男・中村勝範共著『日本社会主義政党史』(経済往来社 の第一章第四節で、 アメリカ文化の明治社会主
- 2 東京経済大学助教授大原慧氏の精力的な諸研究および松尾章一

氏の研究がある。

紹介されたもの以外存在しないようである。(戦前編)』(昭和四十一年一月) に一七三頁から 一七八頁にかけて(歌前編)』(昭和四十一年一月) に一七三頁から 一七八頁にかけて

生涯

(五) (Social Evolution)を読んでいた。後に金子をして、と言われていた。後に金子をして、と言われていた。の質・進歩と貧困』(Progress and Poverty)を、ン・キッド(Benjamin Kidd, 1858-1919)の『社会進化論』(Social Evolution)を読んでいた。後に金子をして、この二書は彼をして社会主義を知らしめ、社会主義に近てり、常知が正式に近て早稲田中学校に入つたが中退して築地英和学校(後の明治学院)に入り、徳富猪一郎の書生となつて文学を学び明治三十二人である豊崎善之介のすすめで金子もこの会に入会した。かれは度体出席をすすめられたが会合に出る機会がなかつた。この頃、安部機体、村井知至、片山潜らが社会主義研究会を組織し、その会員の一様、村井知至、片山潜らが社会主義研究会を組織し、その会員の一様、村井知至、片山潜らが社会主義研究会を組織し、その会員の一様、村井知至、片山潜らが社会主義研究会を組織し、その会員の一様、村井知至、片山潜らが社会主義研究会を組織し、その会員の一様、村井知至、片山潜らが社会主義研究会を組織し、その後の明心が純文学に限られていて政治、経済、社会については全く関心がなかつたからである。しかし金子はこの当時、わが国の社会主義で記るの書となつた、と言わら主義を知らした。後に金子をして、この二書は彼をして社会主義を知らした。後に金子をして、この二書は彼をして社会主義を知らした。

ている。

二日に彼は「米国社会民主党」に入党した。あとでも見るように彼ハミルトンに 訪問している。 明治三十六年(一九〇三年)四月二十(3) (3) (3) (4) 三十三年の夏頃に3かけての間であろう。渡米後の金子はヘンリー・彼が渡米したのは、はつきりしないが明治三十二年の後半から同 の都市で苦闘し、学生として調査に従つている中においてであつた。(1) チックな物語やスケッチであつた。彼が社会主義を信奉するようにもトルストイの教訓を好んでいたから、彼の書くものは詩やロマン 撃してからである。彼の人道的なセンチメントは社会主義に彼を行 数知れぬほど多くの立ちん坊がいるという社会のコントラストを目 をして社会主義者たらしめた最大の原因は、一方に一人の主婦が二 なつたのはアメリカへ渡り、ニューヨークやその他のアメリカ東部 タリズムであつた。そして日本の多くの学生がそうであるように彼 の彼はまだ階級闘争の意識は抱いておらず、ただ純粋なセンチメン てこの二人の精神を尊敬せずにはいられなかつたのである。この頃 (゚タ) 彼はトルストイとクロポトキンのものを文学として 読ん だ。 そし カへ渡ることになつたが、それまでに彼が特に熱心に読んだものは(8) 報』の主筆として大いに信用を得て、社主より資金を受けてアメリ かしめずにはおかなかつたのである。 十人の僕婢を召使うをもつて誇りとしているのに、他方においては トルストイとクロポトキンのものであつた。ロシア文学を愛読した 金子の希望は、 はじめ文学者になることであつた。 『埼玉経済新

り、有島にとつて金子は「非常に薬になつた人」となつた。横山大気。有島にとつて金子は「非常に薬になった」と過しているうちにハーバード大学へ出てみようということを思い立ち、同大学への入学の手続きをすませた。ハーバード大学で有島立ち、同大学への入学の手続きをすませた。バーバード大学で有島と過しているうちにハーバード大学へ出てみようということを思い明治三十七年(一九〇四年)九月、ボストンからケンブリッジへ明治三十七年(一九〇四年)九月、ボストンからケンブリッジへ

明治三十八年(一九〇五年)一月十五日に金子は、ボストンの社会主義者と握手をして大喝采を博した。その演説のテーマは「誤まり伝えられている日本」初の演説をした。その演説のテーマは「誤まり伝えられている日本」指手さえ湧き、話し終ると多くの質問がでた。ついで二十一日には場からの演説であつた。彼の演説は終始注意深くきかれ、しばしば場からの演説であるブロックトンで再び社会主義者としての立場がでいる。

正社員として勤務することになつた。彼はこの多幸なる機会を得たいた。と発展すると彼はこれを手伝うようになり、十一月十日頃からのうちに『シカゴ・ソシアリスト』が『日刊シカゴ・ソシアリスト』を発展すると彼はこれを手伝うようになり、十一月十日頃からた。と発展すると彼はこれを手伝うようになり、十一月十日頃からた。と発展すると彼はこれを手伝うようになり、十月中旬に金子はシカゴに移り、無明治三十九年(一九〇六年)十月中旬に金子はシカゴに移り、無明治三十九年(一九〇六年)十月中旬に金子はシカゴに移り、無明治三十九年(一九〇六年)十月中旬に金子はシカゴに移り、無明治三十九年(一九〇六年)十月中旬に金子はこの多幸なる機会を得た

ことを喜ぶのであつた。

明治四十年(一九〇七年)五月には、これまで故国の新聞雑誌に (22) 書き送つたものを集めて平民書房より『海外より見たる社会問題』 として出版した。彼の在米中に出されたものであり、彼の唯一の書 物である。その翌六月にはシカゴで月刊雑誌である The Socialist Woman を発行した。金子は managing editor であり、彼の唯一の書 Socialist Woman は一九〇九年(明治四十二年)三月から The Progressive Woman と改題された。この雑誌の対象とする範囲が広が つたわけである。誌名はかわつたが 金子喜一も 彼の 妻もそれぞれ managing editor であり editor であることにはかわりはなかつた。 なおこの間、月刊英字雑誌『革命的日本』を明治四十年秋頃発行し なおこの間、月刊英字雑誌『革命的日本』を明治四十年秋頃発行し なおこの間、月刊英字雑誌『革命的日本』を明治四十年秋頃発行し

者希望はぬけきれておらないようである。

観、菱田春草と接し、有島武郎と親しく交わるところを見ると文学

明治四十二年(一九○九年)六月、金子は The Progressive Woman 明治四十二年(一九○九年)六月、金子は The Progressive Woman の巻頭に、病気となつたのでしばらく仕事をやめて休養しなくてはならなくなつたことを告げた。彼は十年の間、彼の帰国を待ちわびなあるが、病身や生活のたたかいに疲れた身を休めるに故国以上のであるが、病身や生活のたたかいに疲れた身を休めるに故国以上のであるが、病身や生活のたたかいに疲れた身を休めるに故国以上のいて、日本の女性がどういう苦痛を受け、自由のためにたたかつていて、日本の女性がどういう苦痛を受け、自由のためにたたかつているかを知らせようと約束した。そして、何時アメリカへもどれるいるかを知らせようと約束した。そして、何時アメリカへもどれるいるかを知らせようと約束した。そして、何時アメリカへもどれるかわからぬが、それはいつに彼の健康にかかつていること、日本にかわからぬが、それはいつに彼の健康にかかつていること、日本にいるかないのである。

間ほどで満三十四歳になるという年であつた。の土を踏み、療養につとめたが、同年十月八日死去した。あと二週た。彼は結核におかされていたのである。明治四十二年七月に故国とどまるのは 数ヵ月かあるいは もう少し 長いかもしれないと 述べ

- (1) 当局の調査になる『社会主義者沿草』によると「明治八年十月生」(右上巻近代日本史料研究会刊 三一二頁)となつている。しかしThe Progressive Woman(Girard, Kansas, U.S.A.), Vol. III, No. XXXII, January, 1910. の Kiichi Kaneko, "Citizen of the World"によれば、Mr. Kaneko was born October 21, 1876, at Sasage, near Yokohama, Japan. となつている。The Progressive Woman の記述が正しいようである。
- (2) 前掲『社会主義者沿革』三一二頁。
- (3) 右同。前掲 Kiichi Kaneko, "Citizen of the World"によれば、(3)右同。前掲 Kiichi Kaneko, "Citizen of the World"によれば東京の月刊雑誌の編集をしていたとあるが、これは埼玉県の方が正東京の月刊雑誌の編集をしていたとあるが、これは埼玉県の方が正東京の月刊雑誌の編集をしていたとあるが、これは埼玉県の方が正東京の月刊雑誌の編集を表現していた。

- 収三六三頁、三六五頁の中でも明らかである)。 治文化全集 第六巻 社会篇』昭和三十年十月 日本評論新社〉所
- (6) 前掲「予は如何にして社会主義者となりし乎」(前掲『海外よ
- も He early chose literature, however, as his profession,...とある。そし所の者は実に文学にてありし也、露骨に白状すれば予は狭き意せし所の者は実に文学にてありし也、露骨に白状すれば予は狭き意でが、「予がはじめて米国行を思いたちし当時に於て予が頭脳を支配の、「予がはじめて米国行を思いたちし当時に於て予が頭脳を支配の、「予がはじめて米国行を思いたちし当時に於て予が頭脳を支配の、「予がはじめて米国行を思いたちし当時に於て予が頭脳を支配の、
- (8) 前掲『社会主義者沿革』上巻三一二頁。
- ー五四頁に所収) 十八年一月二十九日。これは前掲『海外より見たる社会問題』四八(9)「トルストイとクラポトキン」(平民新聞 第六十四号 明治三
- (2) Kiichi Kaneko, "Citizen of the World."
- (1) Ibid.
- 中に「ヘンリージョオジが墓にまうづ」という詩がある。(13)「旅窓雑吟」(『日本人』第一四七号 明治三十四年九月二十日)
- 14)「ボストン便り」(直言 第二巻第十一号 明治三十八年四月十

六月

- り見たる社会問題』所収 十頁) 前掲 「予は如何にして社会主義者となりし乎」(前掲『海外よ
- 月十一日) (16) 「ボストン便り(17) (平民新聞 第五十七号 明治三十七年十二
- ジタリ」(三二二頁)とある。 (17) 「ボストン便り」(平民新聞 第五十九号 明治三十七年十二月(77)「ボストン便り」(平民新聞 第五十九号 明治三十七年十二月
- 学へ入学後社会主義者になつたように記されているが、大学入学よきにあげた西田氏の『光』解題中の金子の紹介では、ハーバード大きにあげた西田氏の『光』解題中の金子の紹介では、ハーバード大きにあげた西田氏の『光』解題中の金子の紹介では、ハーバード大きにあげた。
- 十八年三月十二日) 1905)及び「社会主義の処女演説」(直言 第二巻第六号 明治三1905)及び「社会主義の処女演説」(直言 第二巻第六号 明治三十八年三月十二日)

り一年前に社会民主党に入党している。

- 第二巻第八号 明治三十八年三月二十六日) 右同「社会主義の処女演説」及び「金子喜一氏の演説」(直言
- 民新聞 第一号 明治四十年一月十五日)三十九年十二月五日)及び「シカゴ社会党日刊新聞発行物語」(平21)「シカゴ便り 第一信、第二信」(光 第一巻第二十九号 明治
- 大原社会問題研究所編『日本社会主義文献 第一輯』(昭和四年九の序がある。明治社会主義研究上重要な文献であると思われるが、る。また本書には四頁からなる幸徳秋水の序、二頁からなる堺利彦(2) この書については当時の社会主義諸新聞に何回か広告が出てい

- にその目次と幸徳の序を紹介している。(六八頁)、細川嘉六監修・渡辺、塩田編『日本社会主義文献解説』(六八頁)、細川嘉六監修・渡辺、塩田編『日本社会主義文献解説』(日本社会主義文献解説』(五八年二月 大月書店)では掲載されておらない。 唐沢隆三(一九五八年二月 大月書店)では掲載されているのみ で あり月)にはわずか二行の説明が附されて掲載されているのみ で あり
- (32) われわれが今手にしている The Socialist Woman は一九〇四年四月発行の第一巻第十一号以降のものである。これを逆算していくと、月刊雑誌であることから創刊号は一九〇七年六月に発行されたものと思う。なお第十一号から十四号までの発行所及びその所在地は The Socialist Woman Pub. Co. 619 East 55th Street, Chicago, U.S.A. である。しかし十五号からは発行所名はかわらぬが、その所在地は Girard, Kansas, U.S.A. となつている。
- Woman Pub. Co. Girard, Kansas, U.S.A. である。(25) 大阪平民新聞第十一号(明治四十年十月二十日)に掲載されている金子から森近運平への書簡。
- (%) My Farewell Words (The Progressive Woman, Vol. III, No. XXV.)
- Kiichi Kaneko, "Citizen of the World"の記事とも一致する。(幻) 前掲『社会主義者沿革』上巻 三二二頁。なお死去の年月日は

二 人道主義思想

アメリカにわたり、ニューヨークその他のアメリカ東部の都市で

米した彼がまずしみじみと感じたことはアメリカは第二の故郷であ唱えるヒューマニズムの立場が、この頃の金子のものであつた。渡ヒューマニズムであつた。諸々の社会的束縛からの人間性の解放をヒューマニズムであつた。諸々の社会的束縛からの人間性の解放を生活の闘いがはじまるまでは金子の思想はまだ社会主義に近づいて生活の闘いがはじまるまでは金子の思想はまだ社会主義に近づいて

るということであつた

イギリスの及ぶところではないとする。 府党をもいれて、綽々閑天地ある」は世界広しといえども、(1) しえない状態である。これにたいして「堂々乎として極端なるデモ にさからえば不敬であり非国民といわれて堂々たる自己の主張はな 事も日本至上主義、 てもアメリカは金子の第二の故郷となるものであつた。日本では何 新参者とさげすまれ、彼にとつても数多くの気に喰わぬことがあつ 爵位のない新平民が跋扈する国と罵られ、古い歴史をもつ国からは カ以外にはないと彼は考えるのである。アメリカこそ自由、 クラシーを主張し、非帝国主義を鼓吹し、過激にして殺伐なる無政 ドイッ人からは品位のない国民とあざけられ、 個人主義、言論の自由の楽郷であり、 忠君愛国でなくては 出世ができず、 ロシアや日本やドイツ、 イギリス人からは この風潮 民主政 アメリ

<u>ځ</u>

して大胆に革命の旗をなびかせてあらわれたという文字ではじまるクロポトキンは正義の二大戦士であり、皇帝の王座の前へ勇敢にそに、彼は短い英文詩をかいて新聞に寄せた。それは、トルストイとことは、人間社会の改善ということであつた。アメリカへ渡つた年この自由と民主主義の溢れるアメリカにおいて彼が考え主張した

で代表者として主張される社会主義は経済的教済をもつて社会問題を代表者として主張される社会主義は経済的教済をもつて社会問題を代表者として主張される社会主義は経済的教済をもつて社会問題を代表者として主張される社会主義は経済的教済をもつて社会問題であるが、それだけをもつて社会問題が解決するとは考えない。倫理的教済もいつそう必要であると金子は考える。なぜならば人間は活ける動物であるから食わなくてはならず、住まなくてはならず、着なくてはならないから、この点で経済的改革は必要不可欠である。とくてはならないから、この点で経済的改革は必要不可欠である。とくてはならないから、この点で経済的改革は必要不可欠である。とくてはならないから、この点で経済的改革は必要不可欠である。とくてはならないから、この点で経済的改革は必要不可欠である。とくてはならないから、この点で経済的改革は必要不可欠である。とに強く警戒に在る。社会問題を物質的側面からだけでとらえることに強く警戒に在る。社会問題を物質的側面からだけでとらえることに強く警戒に在る。社会問題を物質的側面からだけでとらえることに強く警戒してやまぬのである。

子

大れることができまい。中には思想・主張の上において相争い、相来思想家・改革者は多士済々であつて、どう考えても一つの枠には、トー、ウェスレー、チャンニング、カライル、ラスキン、ブース、トト、ウェスレー、チャンニング、カライル、ラスキン、ブース、トト、ウェスレー、チャンニング、カライル、ラスキン、ブース、トト、ウェスレー、チャンニング、カライル、ラスキン、ブース、トルストイ、クロボトキン、フレデリック・ハリソン、ステッド、クロスビー、ヘンリー・ジョージらである。ことができない。他に思想・主張の上において相争い、相楽の中で書籍の虫になれということができまい。中には思想・主張の上において相争い、相楽の中で書籍の虫にないである。彼塔の中で書籍の虫にないである。彼塔の中で書籍の虫にないである。彼塔の中で書籍の虫にないである。

言い切れないものもある。彼には彼の言い分もあるのである。たからである。しかしただ彼の思想そのものが混迷していたとだけただとした一つの理由は金子の思想そのものが純化しておらなかつ対立する者も多い。このように矛盾し対立する者をもつて人道の戦

金子は、この広い世の中のことを説明するのにただ一つの主義でなるよいに大生は大平無事であると信じ、キリスト教信者はキリストが実現されたら人類の幸福は得られるという。しかし、世の中はそが実現されたら人類の幸福は得られるという。しかし、世の中はそが実現されたら人類の幸福は得られるという。しかし、世の中はそが実現されたら人類の幸福は得られるという。しかし、世の中はそが実現されたら人類の幸福は得られるという。しかし、世の中はそが実現されたら人類の幸福は得られるという。しかし、世の中はそが実現されたら人類の幸化せしめていかなくてはいけない。こういう立を応用して人類を進化せしめていかなくてはいけない。こういう立を応用して人類を進化せしめていかなくてはいけない。こういう立を応用して人類を進化せしめていかなる主義にも多少の善は含まれているから、その善の部分は生かして人類の進化に応用させるべきとを定むるとは沢山ある。而して又聞くべからざることもあるのである。要とは沢山ある。而して又聞くべからざることもあるのである。要とは沢山ある。而して又聞くべからざることもあるのである。要とは沢山ある。而して又聞くべからざることもあるのである。要とは沢山ある。而して又聞くべからざるべきとを定むるよ

く、また神学、哲学でもなくて、あらゆる学問の間に見出さるべき

人道であり、人間学でなくてはならない、という。

る者として、キリスト教者からは偉大なる預言者として見られたが、力強き加担者として、無政府主義者からはその哲学的側面を代表せこれが金子喜一の立場である。トルストイは、社会主義者からは

り他ないであろう」

ニティーの大流である。金子は以上のようにトルストイを評価し、かつたのである。トルストイの根底を流れているのは実にヒューマる人道の光を見たのである。その光のみを見て、その暗い所は見な会主義の中にも、無政府主義の間にも、キリスト教にもその輝いていうちのどれか一つだときめつけるのは誤りである。トルストイは社トルストイ自身はそのどれでもなかつた。トルストイをもつてそのトルストイ自身はそのどれでもなかつた。トルストイをもつてその

る。しかし、このユートピア的で、楽観的であるところが金子喜ーなく、あらゆる思想から社会的問題を解決するのに役立つものは食なく、あらゆる思想から社会的問題を解決するのに役立つものは食なく、あらゆる思想から社会的問題を解決するのに役立つものは食なく、あらゆる思想から社会的問題を解決するのに役立つものは食なく、あらゆる思想から社会的問題を解決するのに役立つものは食なく、あらゆる思想から社会的問題を解決するのに役立つものは食なく、あらゆる思想が必要があるところが金子喜した。

は対称的である。

を判別し難いが、十六世紀は十五世紀にまさり、十七、八世紀は十七、小世紀は大高も歴史を繰り返して見る時は、幾多の異れる点に於て、人間社高も歴史を繰り返して見る時は、幾多の異れる点に於て、人間社を介別に悪しく見過すの病ありと、盖し如何に盲目なる人と雖もを余りに悪しく見過すの病ありと、盖し如何に盲目なる人と雖も

の一つの特徴である。

「今日の社会改革家の見解は多くは否定的にして、現社会の価値

震となることであるという心境にまでなつた赤羽巌穴とも金子喜一震となることであるという心境にまでなつた赤羽巌穴とも金子喜一大変の霊火となることであり、地上のすべての物を崩壊しつくす地大変の霊火となることであり、地上のすべての物を崩壊しつくす地た。また挫折の連続の生涯の中で、病的なまでの被害者意識をもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にふれるもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にふれるもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にふれるもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にふれるもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にふれるもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にふれるもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にふれるもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にかれるした。また挫折の連続の生涯の中で、病的なまでの被害者意識をもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にふれるもち、ついに、全身炎となつて浮世の中を転げまわり、身にかれるとを承認すると金子はいう。こういうようとなることであるとであり、地上のすべての物を開壊している。

トルストイの歩んだ道こそ人道の道であるといつた。

であつたのは、ヒューマニズムは道楽哲学者の言葉の遊戯であつてい。楽観主義が彼の特徴であるが、家居して夢想に耽るというのでいえず、いたずらに議論に精緻であつても、情熱なく氷のような者いえず、いたずらに議論に精緻であつても、情熱なく氷のような者はヒューマニストとはいえないというのである。金子によつてあげはヒューマニストとはいえないというのである。金子によつてあげはヒューマニストとはいえないというのである。金子によつてあげられた欧米の思想家、文芸家、社会運動家はいずれも社会的実践家のおれた欧米の思想家、文芸家、社会運動家はいずれも社会的実践をあってあったのは、ヒューマニズムは道楽哲学者の言葉の遊戯であつてあげたが、楽観主義でもない。

金

準があるのであつた。 矛盾があつても、実践家であつたというところでは人選に一つの規はならないとする彼の立場から選ばれたものである。思想の面では

- (1) 前掲「よしあし草」
- (2) 前掲「トルストイとクラボトキン」。この論文は明治三十八年一月二十九日の『平民新聞』第六十四号に掲載されたものだが、論文の冒頭に、Two great Soldiers of Justice, Appeared at the front of Czar's throne, Bravely and boldly they arouse, Lifting up the flag of revolution. という文字ではじまる 四節からなる詩がのつている。これは金子が 渡米した年に「当時シカゴ市から発行していいる。これは金子が 渡米した年に「当時シカゴ市から発行していいる。これは金子が 渡米した年に「当時シカゴ市から発行している。

ものであるという。

- 第一五一号 明治三十四年十一月二十日)(日本人(4)「ヒューマニチーを論ず――無名氏に与うる書――」(日本人)
- (5) 右同。
- 問題』一六五頁)
- (7) 右同(右同書 一六三—一六四頁)
- (8) 前掲「社会問題の物質的側面」
- (9) 幸徳秋水 「後のかたみ」(塩田庄兵衛編『幸徳秋水の日記と書

の僕婢を召使うことをもつて誇りにしていること、百万長者が女優して他方では壮麗なる建物、快走する自動車、一人の主婦が二十人

の貧児とかれらの悪習慣等が彼の行く先々で発見された。これに対工女の境遇をきいたこと、立ちん坊の群、ユダヤ人やイタリア人街

醜業婦が白昼街頭を横行すること、失業者の存在、あわれむべき

- 簡』所収 一九五四年 未来社 一八頁)
- 日) 市羽巌穴「熱火冷火」(『新紀元』第十号 明治三十九三八月十日)
- (11) 前掲「社会問題の物質的側面」

三 社会主義思想

と結婚すること、富者の所有する遊船の一ヵ月の費用が数万円であ 有名なビショップが財産ある寡婦と結婚したこと、平等で

主義に往かしめた」のである。すでに記したが一九〇三年四月二十(2) 二日、彼はアメリカ社会民主党に入党したのである。 て金子の「平生のヒュマニタリアン的傾向は予を導きて 終 に 社 会 くために学者にきいたがなんら解決策はあたえられなかつた。そし するのは必然であるのか、という疑問をもつようになり、これを解 のである。このコントラストを見て、かくの如く極端な両極に分解 あるべき教会の椅子が富者の金で専売されること等が彼の眼に入る

ずる度合いは欧米以上だといつて社会主義者になつていつた。幸徳(5) 惨を実見して社会主義者となつた。 は政治への関心から社会主義者となり、 治社会を一新するための唯一無上の主義として社会主義の急要を感 点で社会主義を必要とする度合いは少いが、 腐敗堕落し てい る政 能力を有する労働者が職を失つて飢えるということがないからこの になつたコースとは異る。幸徳の場合は、日本においては正当なる されていると信じていた。 こういう点で、 幸徳秋水が 社会主義者 賛する。渡米後、三年経過しても民の声はよくアメリカ政治に反映 点をおいているが、アメリカを軽視するのは誤りであると此国を礼 なくてはならない。日本では海外視察とか留学生はヨーロッパに重 た。アメリカの自由にして進歩的なる教育制度は日本も多いに学ば **に冠たる自由な国であり、アメリカは彼の第二の故郷であるといつ** アメリカに対する金子の観察は変化している。渡米直後は、世界 金子は下層階級の貧困

> の物質的生活の贅沢さに驚かされ、黄金に支配される生活を批判し ときは自由の楽郷だと思つたが、やがて国内を観察してアメリカ人 さらにアメリカにやつてきたゴルキーが、ニューヨーク湾に入つた とへの反省のあらわれとして結構なことであるという意見である。(9) の論争は金が教育や宗教を支配している時代に妄りに金を受けるこ でこれを拒否すべし、いや受けるべしという賛否両論が出たが、こ ンボード外国伝道会社へ十万円寄附したことについてアメリカ国内 されているのだと批判する。そしてまたロックフェラーがアメリカ(®) て大胆なる説教、言論、学説をとかない、つまり教会も教授も買収 少数富豪の寄附によつて維持されているから牧師も教授も自由にし えているが、それだけでは問題は説明されぬ、離婚は婦人の解放 米国における離婚問題を論じ、宗教家は口を極めて徳義の堕落を唱 目をひくのである。これに対して金子はどうかといえば、たとえば めて濃厚である。政治権力に対するストレートな攻撃批判が読者の となつたところから予想されるように政治権力奪取的な色彩がきわ た記事を詳細に熱意をこめて日本の同志へ書き送るのである 面があるのだと弁護する。あるいはまたアメリカの大学や教会は 幸徳の社会主義とのかかわりあいは、 政治的関心から社会主義者

ものとはそう変化ないであろう。 彼は政治権力批判をあまりし おいて、その後にアトランダムにとりあげてもいま紹介したような のではない。金子の論文中、注目作と考えられる論文を選び出して とを批判したり、女性解放を論及したものだけを故意にとりあげた

金子の論文の中から、金力支配とパンの問題に汲々としているこ

これを紹介するのである。 これを紹介するのである。 これを紹介するのである。 あるいは渡米当時は言論の自由な国であると批評するだけである。 あるいは渡米当時は言論の自由な国であると批評するがである。 あるいは渡米当時は言論の自由な国であるとれる紹介するのである。 もれを紹介するのである。

紹介する。 人の眼に写り、アメリカ人によつて分析された日本をつぎのようにれでは次に金子は日本をどのように見たであろうか。彼はアメリカの物質文明批判に偏つていたことは以上述べてきた通りである。そ義経済の分析、それのもつ矛盾について論ずるのでなく、アメリカ

あるアメリカ宣教師は、日本には学問及び信仰の自由がないと批

社会主義者金子喜一がアメリカを批判する時、アメリカの資本主

質は「感情的性質」(sentimental temperament)であつて、これをか得しついで学問の自由を獲得し終ろうとしているのに、日本においてはアメリカの戦い古した政治上の自由を獲得する戦いをすすめねではアメリカの戦い古した政治上の自由を獲得する戦いをすすめねがならないと日本の後進性を指摘する。日本における鉄道、学校、野便電信等の発達は素晴らしいものがあるが、日本人のセンチメントすなわち自然観、帝室観、人生観は依然としてかわらないというアメリカ人学者の分析を紹介して金子は日本人の皮相は変化したが実相は変化しない、実相の変化がないかぎり日本人は西洋文明を理実相は変化しない、実相の変化がないかぎり日本人は西洋文明を理実相は変化しない、実相の変化がないかぎり日本人は西洋文明を理実相は変化しない、実相の変化がないかぎり日本人の性解したとはいえないのだという。そしてさらに進めて、日本人の性解したとはいえないのだという。そしてさらに進めて、日本人の性解したとはいうは対象である。

全体を通じて金子喜一の言論批評は良識的である。彼は明治の社会主義新聞にも多くの論稿を寄せたが、彼の主張の内容を象徴するただの一篇しかなかつたということが、彼の主張の内容を象徴するただの一篇しかなかつたということが、彼の主張の内容を象徴するとに抗譲したものである。たしかに堂々たる主張だがそれは痛烈なとに抗譲したものである。たしかに堂々たる主張だがそれは痛烈なとに抗譲したものである。たしかに堂々たる主張だがそれは痛烈なる批判といえるものではなく、良識的な政府批判である。良識的な発言を通して日本の在るべき姿を金子は追求して理解できるというであるが、日本改革の積極的なブランを一読して理解できるというまとまつたものはない。日本批判を越えて、日本においてトルストを体を通じて金子喜一の言論批評は良識的である。彼は明治の社会体を通じて金子喜一の言論批評は良識的である。彼は明治の社会体を通じて金子喜一の言論批評は良識的である。彼は明治の社会体を通じて金子喜一の言論批評は良識的である。彼は明治の社会体を通じて金子喜一の言語批評は良識的である。彼は明治の社会体を通じて金子喜一の言語、ないにないません。

イの影響が顕著にあらわれたということであるとした。たとえば幸

ルストイの影響がもたらすであろう、といつた。 日本の著名な人物であるが、彼等はいずれもトルストイアンである日本の著名な人物であるが、彼等はいずれもトルストイアンであるをいうのである。日本においてはトルストイの影響は思想家や文章をいうのである。日本においてはトルストイの影響は思想家や文章というのである。日本においてはトルストイの影響は思想家や文章というのである。 といつた。

どこまでも主張するが、なにごとも社会主義の世になつたならば憂 いというのが彼の信条であつた。 はなくなるという我田引水的な筆鋒をすることを平生心よしとしな するのが社会主義なら彼は社会主義者という名を辞退せねばならぬ 決して一つの主義に妄従する必要はない。もしマルクス主義に妄従 なり。バクニン可なり。ヘッケル可なり。マルクス可なりである」。 (9) ティーの社会主義であり、それは資本の私有を廃止して共有を説く うにさしつかえないと断言した。彼はマルクスやエンゲルスのよう という。彼は自分のとなえるヒューマニティーの社会主義の善所は る。個人主義もある点に於て可なり。無政府説もある場合に於て可 ことをもつて能事終れりとするものではないとした。「何事でも凡そ スト教的社会主義者ではないといつた。彼の社会主義はヒューマニ な唯物論的な社会主義者ではなく、またキングスレーのようなキリ 読まなかつた。一頁も読まなくとも社会主義者であることをいつこ 人間社会を導びいて、進歩と幸福とを持ち来す者は吾が党の土であ 彼は自分を社会主義者であるといつたが、『共産党宣言』は一頁も

人間社会の進歩と幸福をもたらすものが彼の社会主義 だという

戦論や非婚論、菜食主義等々を唱えるときに苦悩したほど金子喜一をむけるようになつたのであり、トルストイによつて社会的な面に眼つかみどころがない。ただ彼はトルストイによつて社会的な面に眼つかみどころがない。ただ彼はトルストイによって社会的な面に眼が、その言葉の意味は理解できても、彼の社会主義の内容は漠としてかった。

見たる社会問題』所収五―六頁)(1) 前掲「予は如何にして社会主義者となりし乎」(前掲『海外より

がヒューマニティーの社会主義をつきつめたかどうか疑問である。

- (2) 右同(右同書一〇頁)
- 四二―一四七頁)年十二月二十、二十七日。前掲『海外より見たる社会問題』所収一年十二月二十、二十七日。前掲『海外より見たる社会問題』所収一(3)「学ぶべき米国」上・下(平民新聞「第六、七号」明治三十六
- 十九日。前掲『海外より見たる社会問題』所収一二五―一二八頁)(4)「ワシントン所感」(平民新聞(第三号)明治三十六年十一月二
- の源流――幸徳秋水の生涯と思想――」(五五頁、五九頁)参照。界書院(昭和四十一年十二月)所収の「第二章(反議会的社会主義号)明治三十二年七月)及び中村勝範著『明治社会主義研究』(世(5))幸徳秋水「現今の政治社会と 社会主義」(六合雑誌(第二二三
- この点は拙稿右論文で論じた。

6

「米国に於ける離婚問題」(家庭雑誌 第三巻第五号 明治三十

八年五月二日。前掲『海外より見たる社会問題』所収一一一一九頁)

- (8)「買収されたる米国の大学及び教会」(直言 第二巻第十五号 明治三十八年五月十四日。前掲『海外より見たる社会問題』所収六
- (9) 「寄附金十万円の倫理」(直言 第二巻第十六号 明治三十八年 五月二十一日。前掲『海外より見たる社会問題』所収一五一―一五
- (1) 「ゴルキーの見たる米国」(光 第一巻第二十四号 明治三十九 年十月十五日
- (11) 「言論の不自由なる米国」(新紀元終刊号 明治三十九年十一月 十日。前掲『海外から見たる社会問題』所収一六八―一七四頁)
- (12) 「外人の見たる日本人(一)」(平民新聞 第八号 明治三十七年 一月十日。前掲『海外より見たる社会問題』では「ラッド博士の日 「外人の見たる日本人(11)」(平民新聞 第九号 明治三十七年
- 本人観」として所収、六七一七〇頁)
- (4)「外人の見たる日本人(下)」(平民新聞 一月十七日。右同書所収七一―七四頁) 第十号 明治三十七年
- (16) 「日本人排斥とは何ぞや」(直言 第十七号 明治三十八年五月 √15) 拙稿「日本的社会主義の課題──木下尚江論──」(前掲 治社会主義研究。所収 明
- (A) What Tolstoi has done in Japan (The Progressive Woman, (17)「日本政府に問う」(大阪平民新聞 第十号) 二十八日。前掲『海外より見たる社会問題』所収一五五―一六一頁) 明治四十年十月二

Vol. II, No. 16, September, 1908.)

利であるというものではない。というより普通の発言であつたとい

(1) 前掲 「予は如何なる社会主義者なる乎」 る社会問題』所収一六七頁) (前掲『海外より見た

つたという。しかし以上見てきたように金子は良識豊かなヒューマな人物」、「悪魔的なことを吹き込める人」が友だちになれたらよか 枢をなしていた天皇制を批判した木下尚江、日本の革命のためには ニストではあるが決して「悪魔的な人物」ではない。明治日本の中 ちばんの人物だ、といわれる。本当は有島にとつてもつと「悪魔的 しくなれたことは非常に薬になつた、有島の友人の中では金子がい 荒くこづきまわしたのが金子喜一であつた。有島にとつて金子と親 物わかりのよかつた名君のような有島武郎をハーバード大学で手

暴力をも辞せずとした幸徳秋水、日本はおろか世界そのもの、

外に派遣して日本の文明、富強、正義人道を誇説させているが、決 し、これとて他の日本の社会主義者の言論と比較して一等秀れて鋭 してそのような素晴らしいものではないというものであつた。しか るのが日本であるとされる。日本政府は末松謙澄、金子堅太郎を海 者の生活は低くストライキが多いこと、言論の自由が抑圧されてい 歴史であり流血の歴史であつて決して平和な国ではないこと、労働 「社会主義者の見たる日本」であるが、そこでは日本の歴史は戦争の ば金子はどこまでも良識的である。金子のもつとも鋭い日本批判は そのものを破壊させないではおかないといつた赤羽巌穴にくらべれ 知つていたかどうかは社会主義者であつたかどうかの基準にならな らは筆頭の危険人物として警戒された。したがつて社会主義理論を た木下尚江は明治の社会主義者の中で最も人気があり、また当局か うことになろう。あるいはヒューマニストといつてもよい であろ (3) 企図せる人道家也、君の眼中、亦民族の区別、国家の境域なるもの 偏僻なる習慣、 国者也、 らいない。もつとも社会主義の理論は全く知らないと自他共に称し う。金子には社会主義の理論を展開したものは全くといつてよい**く** るが、一言でいえば西川光次郎が評したように「自由思想家」とい なし」といつた。こまかく分析するとたしかに幸徳のいう通りであ 幸徳秋水は金子を評して「世界主義者也、 共産主義者也、自由思想家也、 圧制なる法律に反抗して、 君は旧来の固陋なる道 総ての人類の解放自由を 非軍備主義者也、 非愛

会主義の上にいかなる貢献をしたであろうか。 自由思想家あるいはヒューマニストといつてよい金子喜一は、 社

供しアメリカの社会主義の動向を伝えた点があげられよう。 リカに紹介した功績が考えられてよいだろう。 なかつたことから、 第一はアメリカから金子ほど数多く積極的に寄稿してきた者はい 第二は日本の社会主義者と密接に連絡をとつて日本の運動をアメ 彼がわが国の社会主義者にアメリカの情勢を提

子がアメリカの新聞に寄稿し、 社会主義運動は初めからきわめて国際的な交流をしていたが、 また自ら『日刊シカゴ・ソシアリス

> に考えられよう。 ト』に入社して仕事をなした国際的人間であつたということも第三

第四には The Socialist Woman managing editor としてアメリカはもとより世界婦人解放運動 及び \mathbf{T} he Progressive Woman

の の啓蒙活動をしたということもあげられよう。 そして最後に、以上の活動を総括して直接間接にわが国社会主義

運動に貢献したのである。

月余り後には永遠の眠りについたのである。 いたる父母のいる日本にまさるところはないといつて帰国し、二カ てであつた。病身を養い、生活の闘いに疲れた身体をいやすには老 World という文字を使つた。しかし彼が死去したのは、日本にお The Progressive Woman は金子の死を報ずるに Citizen of にそう在りたいと努力した。彼が死去したとき、彼が主宰していた と謳つた金子である。彼自ら「世界の一市民」であると称し、まさ ように人間は一人で純粋に人間として立つていけるところである、 な貴族もないところであり、ちょうど青空が広く自由に伸びている ている国である。自分の国では何人も支配されず、王座も称号も怠惰 ーマニティーが高揚している国であり、男女が彼等の権利を享受し なろうとした。自分の国は富士山があり芸者がいる国ではなく、ヒュ ヒューマニティーをとく彼は、日本という祖国を越えて世界人に

1 日号に発表したものである(直言 これは初め北米の進歩的月刊誌 The Arena の一九〇五年五月 前掲『座談会大正文学史』一一六頁の中の本多秋五の発言。 第二巻第九号 明治三十八年

十八年六月十八日)に訳載された。 四月二日号の広告)。 それが後に『直言』第二巻第二十号 (明治三

- 前掲『海外より見たる社会問題』によせた幸徳の「序」。
- (4) 西川生「金子喜一君の社会主義」(社会新聞 第一号 明治四

十年六月)

- (5) これは New York Journal へ寄稿した英文詩である。日付不 れている。 明。前掲 Kiichi Kaneko, "Citizen of the World" の冒頭に引用さ
- (6) 前掲「日本政府に問う」の執筆者名の肩書に金子は、この「世 界の一市民」なる文字を入れている。

(後記) The Socialist Woman, The Progressive Woman 謝する次第である。 次氏の御厚意により同盟資料室保存のものを閲覧した。記して感 は渡辺悦